〔質　疑　応　答〕

＊司会：先生方ご報告、ありがとうございました。ご報告の内容から考えれば１時間から１時間半ぐらいの時間は取らなければなりませんところ、30分でということでお願いし大変心苦しく存じております。関連資料を付し要を得たお話をいただきましたので、それぞれのご報告の趣旨は十分お分かりいただけたかと存じます。

質疑に入ります前に、一点申しあげておきたいことがございます。それは我々は報告集団という形での意志統一は、一切していないということでございます。大きなテーマ、共通項だけは話し合い、あとは各自自由な形で問題を出していこうということで、ご報告をいただいたということでございます。

予定よりもちょっと討論の時間が短くなりましたけれども、これから午後６時まで皆さんと質疑応答を行っていきたいと思います。なお真辺さんの報告の中で、学苑出身の青木浜之助の絵巻の話が出ておりました。スクリーンの方では２コマぐらい映し出されたと思いますが、実はこれは報告の中にもありましたように、幅１メートル、長さ８メートルにわたる大変大きな絵巻でございます。ちょうど今、高知の自由民権記念館の方で「三大事件建白運動120年記念展」が行われておりまして、現物はそちらの方で展示していただくということになり、こちらではそのような卒業生がいたという報告に留めようということでございました。しかし、高知の記念館の方で図録を作り、13コマの絵を見開きのＡ３の中にすべてきれいに納められていましたので、急拠これをＢ４版白黒コピーにいたしまして、皆さんにお渡しした封筒の中に別刷りで入れさせていただきました。ご確認いただければと存じます。

それから、田中正造関係についての報告がありましたけれども、実は先週の23日、田中正造および足尾鉱毒事件を研究しているグループが、合同で「足尾銅山鉱毒事件をめぐる人々、早稲田界隈に訪ねて」という形で、早稲田界隈のフィールドを行っております。平民クラブ跡、早稲田実業跡、大隈講堂、早稲田構内（大隈銅像）、平民クラブの移転先などの巡見でございますが、このことは鉱毒事件と早稲田がいかに密接な関係を有しているかの証左であると思います。このことについてご報告かたがたお知らせ致しておきたいと思います。

さて本来でしたら、報告者の方から補足をそれぞれ何分かしていただいて討論に入るというのが一般的ですが、時間がありませんので、もしどうしても付け加えておきたいという報告者の人がおられましたら補足をしていただきます。いかがでしょうか。特にないということでよろしいでしょうか。

それでは、補足はないということでありますので、前もって出していただきました質問に関して、ご紹介し、それに答えていく形をとりたいと思います。質問用紙は全部で５枚届いておりますが、そのうちの１枚は質問というより激励に近い内容で、それを先に読ませていただきます。「反骨在野の精神から、国の助成金などは原則として拒否した学校づくりが必要と思いますが、官の干渉を受けている。情けない。」とあり、また、「最近のジャーナリズムは（テレビを含めて）、付和雷同、感情的、取材スクラム等激しく、特に検察、官庁と組んで正義の味方気取りでバッシングの先頭に立っている。多くのジャーナリストを輩出している早稲田大学として、社会の底流を見通す人材育成、並びに風潮に警鐘を鳴らすべきでは」と述べられております。早稲田の伝統と理念をぜひ貫けというような激励と承りたいと思います。

次にご質問の１つですが、鳩山和夫（立憲改進党）とは、現在衆議院議員の鳩山兄弟の先祖であるのか教えてくださいということでございます。

福井：そのとおりであるというお答えになりますけれども、鳩山に関しては、のちに東京専門学校や早大の校長を務めるなど早稲田との関係がいろいろ深いものがあります。東京の民権運動の中でも特に在野の代言人の代表格と目され、1882年３月には東京代訃組合会長に選ばれていた方です。そういう方が早稲田の草創期に関わったことの意味というのは大変大きいだろうと思います。

＊司会：ご質問の方、よろしいでしょうか。それでは次に真辺先生へということで、東京専門学校開校と前後して設立された他の私立学校は、本校と比較してどのような校風、気風をもっていたのか、簡単にでも紹介していただければ幸いです。また、当時の青年は、これらの私立学校群の中からどこに入学するのかを決めるに当たって、各学校の特色の違いをどの程度考慮していたのでしょうかというご質問が出ております。

真辺：東京専門学校開校と前後して設立された他の私立学校ということですが、現在では東京で代表的な大学というと、だいたい東京六大学というふうに括られると思うのですが、当時は五大法律学校という言い方がされていました。その五大法律専門学校の中身ですが、名前がいろいろ変わっているので今の大学の名前でいいますと、早稲田と明治、中央、専修、法政の５つでした。これはいずれも大体明治10年代にできた学校なんですけど、当時の代表的な私立学校として有名だったのですが、学生の側からいいますと、中でも特に早稲田の学生というのは政治的に尖鋭だったといわれています。それはなぜかといいますと、まず五大法律学校のうち、他の４つ、早稲田以外の四校に関しては、やはり法律学科というものが中心になっている。それに対して早稲田は政治科、正式名称は政治経済学科ですけれども、そこが看板で、法律学科の方はちょっと、あることはあるのですがあまり充実していないという状況でした。それが１つと、やはり創立者が大隈重信であり、立憲改進党と密接なつながりがあったと、その点が大きくて、他の学校に関してはそれぞれ立派な創設者がいるんですけれども、やはり知名度という点では大隈や改進党には及ばないわけで、そういう意味でやっぱり政治的な意識が高い者が他の法律学校に比べると集まっていたのではないかと思います。

学校の違いを当時の青年たちが入学を決めるにあたってどの程度考慮していたかという質問ですが、正確にはわかりませんけれども、まず１つ指摘できるのは、当時の若い人たちが、今と違って割と学校間を移動しているんですね。最初は東京の中心部にある法律学校に入っていて、合わないので早稲田に移ったとか、あるいは慶応義塾に入っていたんだけれども途中でやめて早稲田に入ったとかいう人も結構います。特に早稲田は中心部から離れたところにありましたので、今は結構違いはわからないですけど、当時は本当に周りは田んぼしかなくて、すごい田舎だったわけです。そういう意味では他の学校とはちょっとある場所が違いますし、当時は電車もバスもありませんので、そこに移ってくるというのはやはりそれなりの意識・決断がないと移ってこれないということで、やはりかなりそういう学風の違い、あるいは学校の違いというものを考慮して入ってきているのではないかというふうに考えます。

＊司会：よろしいでしょうか。その次ですが、これは小澤先生でしょうか。渡良瀬遊水地で、今でも銅イオンの沈殿除去を行っているらしいが、この含有レベルはどのぐらい除去されるに至っているかという質問ですが、いかがでしょうか。これは現在どのぐらい除去されているかというようなご質問かと思いますが。

小澤：ご質問ありがとうございます。大変申し訳ないのですが、現在の数値等は了解しておりません。

＊司会：私は現在も渡良瀬の調査、取り組みは続いていると思うのですけれども、これは、何か田中正造関係の研究会の方のご質問でしょうか。

質問者：私、群馬県の前橋の近くの出身なんですけど、時たま渡良瀬の遊水池は子供を連れて散歩がてら行くこともあるんですが、10年ほど前に大々的な河川工事をやりましてね、堰堤を仕切ってしまって川を分離してしまったと。何を始めたのだろうと思っていたら、どうも洪水の時に貯まった水を沈殿濾過して、もともと遊水池というのはそういう性質を持っていたわけですが、それを大々的に改修をやって、それをもっと強化するというならちょっと問題があるのではないかと。どなたも取り上げないので、さて、どこに聞いてやろうかなと思って10年ほど思っていたんですが、そんなことできょうはあえて質問させていただいたわけでございます。大工事をやっていましたよね。今はそういうことを継続的にやっているので、これだけ公害問題がいろいろ問題になってくると、重金属類は特に問題だから、もうちょっと広い分野でこういうものを取り上げてもいいのではないかと思ったわけです。

＊司会：渡良瀬問題というのは今も未解決の問題であり、鉱毒の除去作業は現在も行われているやに聞いています。また、足尾銅山関係を世界遺産にという考えも出されているというようなことを耳にしております。渡良瀬の鉱毒問題について何か付け加えることはございますか。

――：いいですか。今の遊水池は今でいう古河ですかね、利根川と合流する地点のすぐ上にあるわけですから、足尾の方と大分離れているわけですね。そうすると、我々が岡目八目で見ると、あれは東京都の水道水の原泉だから、イオンがそのまま東京の水道水に入ってしまうと。それの除去が大目的で慌てて作ったのではないかと。要するに10年ほど、私ははっきり覚えているが、そんな感じがするんですね。慌てて作ったということは、東京都の水道水の水質基準が大分うるさくなってというような感じもしたんですよ。だから、今いう足尾の方とは関係ないと思うんですよ、ずっと下流の方だから、数十キロ離れていますね。先生のいう何とかの今のいろいろ世界的遺産とかいうものの問題じゃないんじゃないかと思うんですがね。

＊司会：どうもありがとうございます。また議論ができればと思います。次の質問は海保先生にですが、３点ほどございます。第１は講義録はどの程度普及したのか、地域性、年代を含めてお答えいただければということです。

海保：ご質問ありがとうございます。この講義録について、ぜひ皆さんに情報をいただきたいと思っております。といいますのは、例えば大学史資料センターの方々が○○県のどこどこに行ったらおばあちゃんが使っていたよといった具合に偶然見つかる程度で、本当に残存していないんですね。というのは、私も講義録を見てわかったのですが、毎月、例えば数学、英語、国語の科目が１冊に綴じたものが送られてくるとしますと、文章が途中で終わるんです。次の号にその続きが載るんです。で、何ヶ月かして完結した後、全部バラして１科目ごとに製本することになりますので、完成品では残ってないんです。講義録の月謝のことを触れておきますと、1919年文学科の場合80銭、18か月で14円40銭です。1946年（昭和21）の『早

稲田高等女学講義』の場合は、戦後のインフレということもありますが、はじめのうち７円50銭、それが14円、おしまいには20円に値上がりして、さらに、卒業試験も受験料実費10円を添えて申込む事になっておりましたから、計260円以上になったと思われます。ですから、ぜひ講義録に関する情報をいただきたいと思っていますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。

＊司会：その次は、中国の「女性」との関連について、それから第３は、山田わかの果した役割について。結論にいたる文脈について、やや検討が必要だと思いますが、どのように分析なさるのかについてよろしくお願いいたします、ということですが。

海保：すみません、中国の女子学生、中華民国からたくさんの留学生がいらしているのですが、非常に裕福な家庭の出身であることぐらいしか解っていません。文学部、政経学部等で学んでいるわけですが、その後について、これからちゃんと研究されていくべきだろうと私は思います。それから、山田わかについて、私、さらにもっと勉強したいなと思っている最中でありまして、まだまだ未発掘の部分がありますので、研究会を作ってやっていったらいいのではなかろうかと思っている最中でもあります。ぜひご一緒に研究会を作ったらいかがでしょうかということを申し上げておきます。ありがとうございます。

＊司会：ご質問された方いらっしゃいますか。

――：ありがとうございました。私、ちょっとそういうことについて、学生時代に勉強しまして、ただいま先生がおっしゃったことはわかっているのですが、講義録がなかなか見つからないということもあったわけですね。これは秋田の例なのですが、秋田というところは愛国婦人会という団体が戦前に非常に活発な活動を繰り広げておりました。そこでは、高田早苗などが、かなり地方に行きまして、講演をしていたんですね。それと愛国婦人会の接点というのは見つからないのですが、公民館の戦後の普及に活躍した鈴木健次郎という男がいるのですが、彼は戦前は青年団をずっとやっていたのですが、彼が青年期の時代だったのですね。それで非常に感銘を受けて青年会活動に入っていったわけですが、おそらく、そういう歴史の流れからくると、女子学生もおそらくそこに聴講生という、講義録を受けた人とか、いろいろいたんじゃないかという関係がありまして、ただ、こういう学生時代の、随分前になり、聴講しながら私もフィールドワークをしていたということがありまして、ちょっとまだそこが全体的につかめていないということは一つあります。で、先生がおわかりになればということでした。

もう１つ、２点目の中国の女性につきましては、やはり非常にグローバルな視点ということでこういう研究会は必要だと思いまして、実は文学者の田村俊子という人がいますが、彼女は夏目漱石との関連、いろんなことがありまして、中国に渡ったりしているんですね、大陸に。そこで女性とコミュニスト運動ということにも触れているわけです。おそらくそういうところを考えますと、女子学生というのも何らかの関連があるのではないかというふうな観点があります。

３点目の山田わかについては非常に重要な人物です。といいますのは、大正時代に新しい女性たちの開放論というか、女性論が西欧から入ってくるわけですね。１つは西欧からくる女権論、もう１つは北欧からくる母権論というのがあるわけです。この２つが入ってきたときに、市川房枝などはその女権論でいくわけですね。アメリカの婦人参政権運動などの活動をしていくわけですが、母権論の方ですが、これはエレン・ケイなどが主張していたわけですが、これが日本に入ってきたときに、平塚らいてう、山田わかに

よって継承されていくわけです。らいてうはもちろん新婦人協会なので市川房枝と一緒になって、戦後、非常に民主的な関わりを持った人物ですが、山田わかにつきましては、夫が……という関係もありまして、非常に良妻賢母的なところにシフトしているんですね。そうしますと、そこの関係と山田本人がおりますよね、そのあたりの関係のところがきちんとした資料が出るかどうかということを確認したかったのです。恐らく早稲田における女子学生たちが開放というのは、そうした文脈というのが一つあるのではないか。すなわち、先生は先ほど軍部というふうな言い方をなさいましたが、軍部というのは非常に中心的なものですから、大学に関わっていたかというのは非常に疑問なわけですね、特にこの早稲田については。それで結論についてどうなのかというふうな分析をちょっとお願いしたいと思ったです。失礼いたしました。

海保：すみません、どうもありがとうございます。山田わかと早稲田大学に関しては、例えば『早稲田女子学生の記録　1939 ～ 1948』の中に名前が出てくるだけで、何か伝記等があるのではないかと、女性史の上では有名な方ですので、調べようと思っていましたが、ありがとうございます。これからやはり女性史を語る上で、山田わかと早稲田との関わりについて今後掘り下げていきたいと思います。

それから軍部との関わり、これは『早稲田大学新聞』、『早稲田学報』、校友会誌ですが、例えば1939年（昭和14）の女子学生が初めて入学した時の号を見ますと、開いて最初のところに既に校友の出征兵士の名前がずらりと出てくる。それから、その次には、校友の戦死者の名前が出てくる。その後に女子学生の入学という記事が載ってくる時代なんですね。そしてさっき申し上げましたように、女子学部生の最初の卒業生、第１回目の卒業式の総長の告辞の中に、女子学生を早稲田大学に受け入れたことを非常に積極的なこととは異なった発言があります。それから当時、男子学生は教練があります。女子学生も入学したけれども、やはりそれに匹敵するような講義があります。それは私も初めて最近知ったことなんですね。それから大学内には、配属将校がいっぱいいたよというような記事があったり、そこに私もそうだろうとしか言えない、断定できないのですが、田中総長の卒業式告辞自体に違和感を覚えまして、これは何だろうというところで終わっているのですが、今後研究してみる必要があるのではないかと、私はその程度の認識にしか立っておりません。ですから、本当に貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

＊司会：確かに女子入学の問題、そして入学してきた学生のその後の動き、活動といいますか、そういうことについての研究はこれからであると思います。今まで聴講生が何人入った、1939年に入学が許可された、４人入ってきた、そういった一般的なことは見ていたわけですが、こういう人たちがどういう経緯があって入ってきたのか、そして、卒業後どのような活動をしたのか、こうした女子学生の問題の分析、検証はこれから早稲田大学の歴史を考える上においても重要だろうと改めて思った次第です。どうもありがとうございました。

お出しいただいている質問につきましては以上ですので、ここでフロアの方から自由にご質問いただきたいと思います。お名前を。

林：日本医科大学の林といいますけれども、何人の方に質問したいと思っていまして、最初に２つほどですけど、海保さんと、これは真辺さんに関係するかもしれないんですけど、女子教育について、大学時代の女子教育は今日の報告で興味深くいろいろわかったんですけど、専門学校時代については女子教育がなされていないようなんですけれども、なぜなかったのかということなんですね。その原因は何なのかということ。例えば、僕の働いている大学の前身の学校は済生学舎という学校で、実は先ほど言われた吉岡弥

生なんかは入っていた学校で、明治９年なんですけれども、ちょうど明治16年ぐらいに高橋瑞子という女性が医学教育の方に入ってくるわけですけど、早稲田の場合にはそういった女子教育に関係するということは大学以外に、専門学校時代にはなかったのかと。もちろん専門学校といっても各種学校ですので、専門学校令が出されたのはもっと後の方ですけれども、まったくなぜ男性だけであったかというところあたりを質問というか、もし何かわかれば伺いたいと思います。

もう１つは、梅森さんと小澤さんですか、関係する質問かもしれません。もし言われていることでしたら確認の意味でお尋ねしたいんですけれども、足尾鉱毒事件と初期社会主義者の関係ですね、ここら辺をもう少し詳しくというか、関連付けていくとどうなるのかというところで、僕もわずかですけど、例えば早稲田社会学科にいた吉田環という人物がいましたけれども、吉田環も結構足尾鉱毒事件で演説なんかしているわけですね、田中正造なんかと。その吉田環というのは千葉県の初期社会主義者のオーガナイザーなんかをやっていまして、結構、北総平民クラブという農村のサークルができるんですけれども、これは地域の初期社会主義結社なんですけど、その看板を実は田中正造が書いているんですね。正造という名前が入っていまして、それが佐倉にある、佐倉の宗吾霊堂に保存されているんですけれども、それは恐らく吉田環が田中正造に依頼したんじゃないかと考えているわけですけれども、そういった形で初期社会主義と足尾鉱毒事件関係で何か関連していることとか、何かわかっていることがあったら教えていただきたいということですが。

＊司会：ありがとうございます。２件ほどにつきましては、真辺さん、海保さんいただければと思いますが、女子入学がなぜ専門学校時代はなかったのか、男子のみだったのかということになりますが、真辺さんからお願いします。

真辺：まず、学校を設立するにあたって認可が必要だということですね、これが一つあるかと思うんですけど、例えば先ほど取り上げた特別認可学校規則の中でも、いろいろ規定がありまして、前提条件として、例えば尋常中学校卒業証書を有する者、もしくは国語、漢文、外国語、歴史、地理、数学の各科につき、尋常中学校程度の試験を経て及第したる者に限ると、そういう規定があります。そうした前提条件をクリアできる女性がどれだけいたかという規定的な問題がひとつです。それから社会的にもどれだけ女子による高等教育の需要があったかということが問題になってくると思います。医学の方でしたら、助産婦の伝統などもありますけれども、政治学・法学を学びたい女性がどれだけいたかということですね。初期の点に関して言いますと、そういう辺りに一つの要因があったのではないかと思います。

海保：ありがとうございます。済生学舎の門戸開放役高橋瑞子さんに関しては、言ってみますと男子医学生だけに入学が許されていたところを、とにかく３日３晩ですか、門前にすわりこんで女子の入学を認めさせたといった何かそういう逸話が残っているのですが、それは私も『北の命を抱きしめて－北海道女性医師のあゆみ－』という本を作るときに書かせていただきました。そういうことが早稲田大学にはなかったのかとおっしゃられると、1920年度（大正９）の場合、早稲田大学文学部に30人余りの女子の入学志願者があったと『東京朝日新聞』（1920年６月25日付け）には掲載されています。だからといって、それが圧力になったかというと、壁をぶち壊すまでに至っていない。ただ新聞の方が書いてくれているから、何か何となく世間では、ああ早稲田大学は門戸開放に踏み切るんじゃないかなという期待感のようなものがあったと思います。

それから、この当時、付け加えさせていただきますが、国立大学の場合、東北帝国大学、それから北海道帝国大学がいち早く門戸開放をいたします。この理由ですが、いずれの大学も理学部学生定員確保の手段を講じる必要性が生じたことから、女性に入学資格を認可しています。北海道帝国大学はもう少し早く、1918年（大正７）に専科だけに許されるのですが、それは教授会で専科に限り入学許可といった判断だったようです。真辺さんの方がお詳しいのですが、きちっとした文部省の「聴講生規程」により初めて女子に開かれたということで、それ以前にはやはり規則的な意味から言うとなかったということを改めて私も認識いたしました。ありがとうございます。

＊司会：第１の質問に関しては以上のお答えということでよろしいでしょうか、第２の方ですけれども、これは梅森先生、小澤先生でしょうか、足尾鉱毒と初期社会主義者とどのように関わったか、その辺の問題についていかがでしょうか。

小澤：ご質問ありがとうございました。具体的にこういう人がいたといった事柄については専門家の梅森先生がいらっしゃるので、若干ずれるかもしれませんが、この２部の冒頭の紹介のところでもございましたが、足尾鉱毒絡みで、法律畑からというのが珍しいではないかということでした。私自身もこのテーマをいただいた時にちょっと悩んだことがありますが、恐らく一般的に足尾鉱毒の問題というのに関心を持った方は、法律というものについて大変なネガティブな印象をまず最初に持たれるのではないかということです。例えば、「谷中村の滅亡は法律の作用なり」というような『谷中村滅亡史』の木下尚江の序文が代表格ですが、あの時代、ありとあらゆる法令を使って、被害民の正当な要求というものが押し潰されているというまぎれもない客観的な歴史的事実がある。それで、私自身が専攻している法制史というもの、例えば教科書の概説書でも、関西の山中永之佑先生らがお作りになった教科書が足尾鉱毒を取り上げているのはむしろ例外的な試みであって、一般的にはこうした問題についてはほとんど触れないという実態がございます。そういう意味で、どういうふうな角度からこの問題をということはあるのですが、恐らくこういうことになるのかなと考えております。つまり、この足尾鉱毒と初期社会主義、いずれも近代の乗り越えの思想という一面をもっております。ところが、法制史の世界から見ますと、この時代はようやく日本に近代的な法律というものがそろったという、そういう時代にすぎません。憲法、議会といったものが1889年、90年にようやく出てまだ10年足らずというような時代。そして経済社会としての市民社会の基本法典である民法や商法、これは1898年、99年にようやく施行をされているとというような、ようやく六法がそろうという時代です。

一方で、近代法というものを日本社会が自前の原則としてこれから学んでいこう、その前提ができた、それと同時に、もう近代の乗り越えという問題がせり上がって、ぶつかり合ってしまっているというところで、先ほど名前があがったような人たちにとって、近代法というのがどう見えたのだろうかということを調べるのが今後の課題なのかなという意味で、大変大きな宿題を頂戴したというふうに考えております。

梅森：学内の関係で言えば、やはり早稲田社会学会というのが安部磯雄の深いコミットの上にできておりまして、その早稲田社会学会の人たちがその鉱毒の問題に深くコミットしているということで言えば、非常にまだ平民社以前の段階における、最も早い社会主義の一つの学生運動というふうに位置づけることができるのではないかと考えます。そこには意外な人がいるわけで、ご存知のように、永井柳太郎とか。そ

ういう人たちも初期社会主義という形で位置づけられる局面にあったということですね。

もう一つ考えてみたい問題としては、この足尾鉱毒に関わる問題が、単に早稲田の学内の問題ではなくて、それが非常に大きなプロパガンダ、宣伝になることによって、広く学外に、社会一般に対してもこの問題の重要性ということをアピールする結果になったということです。この運動はある種、社会問題に向けて運動によって対処していくという行動様式を宣伝し、その結果、学内外のかなりの人が初期社会主義、社会問題、社会主義に関心を持つようになりました。そちらも見逃せない問題としてあるのではないかというふうに思います。

『平民新聞』等を読んでみますと、足尾鉱毒の問題をめぐって早稲田の学生が騒いでいるのを見て社会に関心を持つようになったという記述がかなり出てきています。具体的な、一番の例は大杉栄です。この時期、大杉栄は陸軍の幼年学校を退学になり、もう一回学校に入り直そうと思って、予備校生の生活をしている状況ですね。今まで軍隊の学校にいて、試験勉強ばかりやっていたわけだから、ほとんど社会について関心を持つ機会がまったくなかった。ただ、この牛込あたりに下宿していたおかげで、同室、同じ下宿に早稲田の学生がいた。そういう学生たちが大騒ぎして、鉱毒事件に向かってさまざまな活動をしている様子にふれて、それが自分が社会問題に関心を持つ一番最初の経験だったというふうに自叙伝の中で印象深く述べています。多分、こういう例は大杉に限らず、かなり多かったのではないかと推測いたします。

その縁で、大杉自身も後に東京外国語学校を出た後ですけど、赤旗事件の直前に、少しのあいだ専科生として早稲田大学に在籍するということがありました。卒業とか、正規生というふうに限るとなかなか難しいですけれども、一時的に関わったというところまで範囲を広げると、本当にいろんな人がこの大学に関わってきたなということを改めて感じるわけです。

＊司会：ありがとうございました。鉱毒問題といいますのは、ご報告にもありましたように、早稲田大学から見れば雄弁会、あるいは早稲田社会学会の誕生に繋がってくる、そういう人たちがある意味で伝統を造るということにもなろうかと思いますが、特にこの社会学会やそれにつながる人々の検討・検証もこれからすべきであると思います。

時間の関係で、あと１人ぐらい、質問があればお受けしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。はい。

――：それでは、私、文京区の稲門会で、36年の政治出身で、きょう……会長も来られていますが、前々から、ちょっと全般的な話なんですが、やっぱり知の早稲田ということで非常に結構なんだけど、やっぱり早稲田らしい在野、野党精神とか大隈精神とか、そういうのはあまり言われないなと。そういうのでお金を集めろといっても、文京稲門会は非常に成績がいいみたいですが、私はまだそういうところがはっきりしないとお金を払わないぞというつもりで今もいるのですが、非常にきょうこういう会は初めてだという最初のご案内もあって、やっぱりそうだったかと。ぜひこういう会をやっぱり早稲田の学生さん含めて、大いにこの精神をPR、注入してほしいなと。それで、こういう時代ですから、タフな学生を作っていただきたいと。自分の昔のことは棚に上げて私は麻雀学部とか遊んでいましたけど、現在は個人的には企業OBですが、吉田茂国際基金というのがございまして、そこの縁があって監事を手伝っていますが、そこでちょっと具体的な質問ですが、姜先生に何もないみたいですから一つお願いしたいと。石橋湛山と吉田茂は戦後は相対立するみたいになっていますけれども、さっきのお話をいろいろ聞いていますと、基本的にはプラグマティズムといいますか、功利主義というか、そういうことで思想、考え方は一致してい

るのではないかなと。ですから戦後、吉田一次内閣の時に石橋湛山さんに蔵相ということになったのですが、その後石橋さんの方が追放にあったりして、政治的ないろんなタイミングでおそらく対決したというふうに思っておるのですが、基本的には、そういう英米と結んで中国なり、満州ですか、満州には当然英米と提携してやるべきだというような吉田さんの論で、石橋さんも小日本で功利的にそういう経済性を追求すべきだということを言われておりますので、この辺はこれから日本がどう生きていくかということにも、現在の日本の一つの指針になるのではないかなと思っておりますが、吉田さんと石橋湛山の相対的な関係、この辺についてご意見があればお聞かせ願いたいと思います。よろしくお願いします。

姜：ご質問ありがとうございます。私は、政治路線ではなく思想の立場からみれば、石橋と吉田には大した対立はないのではないかと思います。特に戦前では、同じくオールドリベラリストとして、英米協調の立場で軍部からにらまれていました。石橋の経済と吉田の外交の分野が違うけれども、英米協調の主張において極めて近いです。また、戦前の二人の間には、食い物の縁もあり、おいしいものがあれば、お互いに呼んだり呼ばれたりした逸話もあります。この関係は戦後にも続き、吉田は鳩山の追放で政権が委譲され組閣（第一次吉田内閣）したとき、鳩山が決めた人事リストも渡されていたが、それを無視して人事を自分の意志でやり直しましたが、二人の閣僚だけ鳩山の指示に沿い登用しました。一人は蔵相になった石橋湛山でした。戦前から信頼のあった、経済専門家の知識を借りたいと思ったのでしょう。要するに、第一次吉田内閣期まで、決して二人の関係は悪いものではなく、戦前からの信頼があったのですね。しかしその後、だんだん関係が離れていきます。それは政治路線、政治グループの違いによるものですね。単なる軍備構想に関して、石橋は自由党というより、むしろ吉田に近いのではないかと思います。吉田の場合、安保依存、アメリカ依存とよくいわれるが、ようするに再軍備したくないという発想ですね。石橋も自由党の一員として、独立自主の原則の下、建前上再軍備を認めるが、最小限にそれを抑えようとしました。経済復興の専門家として、実際、金を軍備に使いたくなかったのが本音です。二人の関係が悪くなった理由は、政治路線の対立のほか、吉田のワンマン政治ぶりによるものが多い。1952年９月石橋は吉田から一方的に自由党除名の処分を受けており、そのまえ、1947年５月、GHQから不当な公職追放を受けたときも、事情を分かっていながら吉田首相は石橋のため弁明しようとしなかったです。ここから、吉田との間に、しこりを生じるようになります。石橋は不当な追放を受けた時点から反米の立場に変わり、対して吉田はアメリカの支持を受け、通算５年もの長期政権を持続し、鳩山の追放解除後、約束を破り、政権を返還しませんでした。これで、吉田派と反吉田派という、政治面の対立が激しくなり、石橋は反吉田の急先鋒をつとめたのも事実であります。しかし、そんな経緯があっても、私は対立が決して二人の自由思想、平和主義の本質に関わるものではなく、歴史のある段階で、その客観的歴史の環境によって作られた隔たりではないかと思います。

＊司会：まだご質問があるかと思いますけれども、時間が参りましたので質疑はここまでとさせていただきます。

長い間ありがとうございました。

よく早稲田精神、早稲田の学風とは何かということについていろいろ言われます。例えば木村毅先生は、「常識の非常に広いというのが早稲田の学風」といい、尾崎士郎は「泥臭さ、生活につながる意欲であり、野生であり反思想的な人間味であり、振幅性の強い親和力」が早稲田精神であると述べています。新垣秀雄さんは野党精神、野党精神とは純粋な力が含まれている、というようなことを言っております。また、

芥川賞作家の八木義徳さんは「民衆の側に在って、時の権力に絶えず抗争して来たのが、早稲田という学校の建学以来の源流的な歴史であり、それが早稲田を貫く一本の太い柱」と指摘しています。坪内逍遥先生は独立独行の精神、自ら信じ、自ら恃む「自恃自信」の精神であると云っておられます。要は自分なりに早稲田精神というものを培っていけばいいのではないかと思いますが、それには何といいましても、強く生きるというエネルギーではないかと思います。もう一つ言えば、大隈さんが言われた“永遠の青年”という問題をどう我々が自分のものにしていくのかという問題がございます。ここで“永遠の青年”として大隈さんが我々に語りかけているのは、わたくしは理想の追求、換言すれば我々は未完成であるということ、我々はまだ未完成の中にいる存在なのだという意識を持つことではないかと思います。荒削りであっても、あるいは冒険しながらでも、失敗を重ねても一つの理想に向かって突き進んでいく、そういうエネルギーを涵養することが校歌にあります“現世を忘れぬ久遠の理想”ということではないかと思われます。大学という一つの法人、そこに学ぶ学生、そこで教壇に立つ教員、あるいは働く職員、こうした人々が一丸となり、未完の中にある、永遠の青年なのだという意識をもって前進することが肝要なのではないかと思われます。それはまた、自由・進取・反骨という理念・精神を時代の変化の中で研ぎ澄まして行くという課題にも繋がるやに思われます。そしてこの「伝統の創造」は今後ますます重要なものになっていくやに思われます。

そうした問題を考える一つの場として、今回の報告会が位置づけられれば幸に存じます。長い時間、お忙しい中をお集まりいただき、最後までお付き合いいただきましてまことにありがとうございました。(拍手)

〔閉　会　の　辞〕

小　林　富久子
（ジェンダー研究所長／教育・総合科学学術院教授）

小林：早稲田大学教育学部教員の小林富久子と申します。私は、この行事に参加しましたプロジェクト研究所の１つであるジェンダー研究所所長を務めております。この場におきまして閉会の辞を述べるようにと言われましたので、一言述べさせていただきます。

本日は、長い伝統を持つこの早稲田大学において、先人たちがいかに本学のモットーたる自由・進取・反骨の精神を学内外に広げるべく尽力されてきたかを多彩なシンポジストの皆様方のお話を通して伺うことができました。

私自身、近年女子学生の割合が相当高くなってはおりますが、まだまだ男性優位ともいえるこの早稲田大学において、ジェンダーへの感受性をどのように養うべきかを考えるべく、学内外のさまざまな分野の研究者の方たちからのご協力をもとにジェンダー研究所を立ち上げてから７年になります。このシンポジウムを通して、改めて性による差別・抑圧を除去しようとする私たちのねらいが、いかに本学のキーコンセプトとしての自由・進取・反骨の精神と通定するものであるかに思うをいたした次第でございます。

今後も、象牙の塔に閉じこもることなく、時代環境に対する批判精神を保ちつつ、究極的には多様な見方や立場が許容されうる、自由で抑圧のない世界を作るのに貢献しうるような研究活動を、他の研究所とも連携しつつ進めていきたいと存じます。そのための土台ともなるこのような場を可能にしてくださいましたコーディネーターの安在先生をはじめ、このシンポジウムを運営してくださいました関係諸機関の皆様方に感謝を申し上げたいと存じます。

最後に、お忙しい中、長い間ご静聴いただきました皆様方、とりわけ最後の質疑応答に参加していただくことで本シンポジウムをさらに実りのあるものにしていただきました方々にお礼を申し上げまして、私の閉会の言葉とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。（拍手）

＊司会：ありがとうございました。ジェンダー研究所長、小林富久子から閉会のご挨拶を申し上げました。これをもちまして本日のプログラムはすべて終了させていただきます。最後までご参加いただき、ありがとうございました。